病院図書室　12(3):64-69,1991・1992

臨床に役立つ雑誌②　—精　神　科—

# 精神医学領域の雑誌展望

田　伏　　薫

## 1. はじめに

精神医学は人間の心を追求する学問であり、精神科は心を病む人間を治療する科である。およそ人間の考えること、すること、すべてがその対象となる。まことに幅の広い領域である。しかも精神医学の中で分野がさらに分化し、専門化してきている。これには神経生理学、病理学、薬理学、神経化学、あるいは精神病理、精神分析、社会精神医学といった方法論上の専門化があり、一方では児童、思春期・青年期、老年期といったライフサイクル上の細分化がある。そして、これらにつれてどんどん学会が独立し、専門誌が創刊されている。とてもすべてを書ききれないので、ここではまず精神科全般を扱う主要誌を国内、国外に分けて紹介し、後に細分化された専門誌にも簡単に触れることにする。

## 2. 国内の雑誌

(1) 総合誌

まず第一にあげるべきは日本精神神経学会の機関誌「精神神経学雑誌」で、これが日本を代表する精神科の雑誌であろう。最初は明治35年(1902年)に「神経学雑誌」という名で創刊された。この頃はPsychiatryとNeurologyはあまり区別されておらず、序文には「或は精神病と云ひ、或は神経病と名づくるも、等しく是れ神経器官の機能障害にして、其徴候に多少の差異あるのみ」と書かれている。論文は縦書きで片仮名が使われ、三浦謹之助、呉秀三、富士川游といった名前が登場し、壮観である。昭和10年に学会名が改称され、誌名も「精神神経学雑誌」となり、この時から横書きになっている。その後、精神神経学会から臨床神経学会が分離して昭和35年に「臨床神経学」を刊行しているが、精神神経学会の方は学会名も誌名もそのままで続いており、本年1992年現在第94巻を数えている。学会誌であるから投稿は会員に限られ、採否は編集委員会で決定される。この雑誌に発表してそれを学位論文にしようという人も多いためか、論文は単独名の長編力作が多い。学会の総会講演や演題、地方会の抄録などの他に学会の活動報告が掲載され、これがなかなかおもしろい。この学会は精神医療のあり方に問題意識を持って絶えず活発に討論している(紛争が多いという見方もあるかもしれない)ので、この記事には目を通しておく必要がある。

なお、わが国の研究を世界に知らせるために、精神神経誌の欧文版ともいうべきFolia Psychiatrica et Neurologica Japonicaが刊行されていたが、1986年からJapanese Journal of Psychiatry and Neurologyと名前を変えて季刊で続行されている。もちろん精神神経誌の翻訳版ではなく、別のoriginalな論文が載っており、また日本睡眠学会やてんかん学会などの抄録もProceedingsとして収載されている。

長い間、この領域には精神神経誌しかなかったが、昭和35年に医学書院から「精神医学」が創刊された。毎号巻頭言を教授クラスが書き、展望(総説)が1篇、研究論文、短報と続き、高水準の内容を保っている。昭和48年から18回にわたって内村祐之の「精神医学の基本問題」という展望が連載され、これは後に同名の書物になった。私

たぶし　かおる:星ケ丘厚生年金病院副院長・神経科部長

はこれが名著であることが当時あまりわからず、いずれにせよ「精神医学」をつなぎ読みすればいいと思って買わなかったが、後に欲しくなった時には絶版になっていた。ずいぶん古本屋で探したが見つからず、ついに友人が譲ってくれた思い出がある。また、古典紹介として精神医学の古典的論文の翻訳が解説つきでしばしば掲載され、たいへん重宝である。この雑誌は創刊以来ずっと同じスタイル、地味な黄色い表紙で、内容が良いわりに紙が悪かったが、一昨年から表紙が変わった。

もう一つの「臨床精神医学」もよく読まれている。この雑誌は毎号時宜を得た特集を組んでいるので、そのテーマについての現在の知識を包括的に得ることができて便利である。きれいな紙で読みやすい。これがいちばん直接に臨床に役立つ雑誌かもしれない。「精神医学」、「臨床精神医学」の両誌とも学会印象記や書評欄を設けている。ページ数も同じくらいで、値段は全く同じである。以上の3誌が精神科全般を扱う主要誌である。

(2)　専門領域の雑誌

個々の専門領域の雑誌について少し述べておこう。星和書店の「精神科治療学」は、治療を中心に据えた臨床に役立つ雑誌として創刊され、はじめは季刊であったが、現在は月刊誌に成長している。「神経精神薬理」もある。少し遅れて「精神科診断学」も発刊された。

「臨床精神病理」は、精神病理学の専門誌として不定期刊から出発したが、現在は季刊の学会誌で、いかにも精神科らしい内容の論文を掲載している。昭和50年に創刊された「季刊精神療法」は最近隔月刊になり、誌名も季刊という語がはずされ「精神療法」となった。例えば、精神疾患における治癒とは何か、というような魅力的なテーマを取り上げて、「臨床精神病理」や「精神分析研究」と似た面もあるが、商業誌であるためもう少し柔らかく、内容も盛り沢山で、書評にも多くのスペースをさいている。

「心身医学」は心身医学会の学会誌である。もとは「精神身体医学」と称していたが、学会名の変更に伴って誌名も現在のように改題された。「失語症研究」、「神経心理学」もそれぞれの学会が発足して刊行されたものである。

日本も今や世界有数の長寿国となり、老年期の痴呆や精神障害がクローズアップされて、この方面の基礎的、臨床的研究もさかんである。この領域の専門誌として「老年精神医学」が創刊され、内容の良い雑誌であった。老年精神医学に貢献した人々というおもしろいシリーズが連載され、友人・先輩達も執筆していたので、それを読むために私も一時購読していたが、出版社の事情で廃刊になった。しばらく後に「老年精神医学雑誌」が学会の準機関誌として刊行された。内容もレイアウトもよく似ているが、誌名や出版社も違うし、新たに第1巻から始まっている。こういう場合は後継誌とは呼べないようである。

以前は一口に児童精神医学と言っていた領域もさらに細分化して、「児童精神医学とその近接領域」は「児童青年精神医学とその近接領域」になった。最近、「思春期青年期精神医学」が同名の学会の機関誌として創刊された。ややこしいことだが、対象を正確に言おうとするとこのようになってしまうのだろう。

かつて精神科は特殊な科で、患者は精神病院に収容するものと考えられていた時代があった。戦後、多くの総合病院に精神科が設置され、精神疾患の診療が行われている。さらに、他科の患者で精神科的問題を呈する者に対して consultation-liaison psychiatry が発達してきた。昭和63年に恩師の金子仁郎先生を理事長として日本総合病院精神医学会が設立され、機関誌「総合病院精神医学」が刊行されている。

一方、総合病院や大学にいると見逃してしまいがちな雑誌を紹介しておこう。「日本精神病院協会雑誌」が同名の協会から刊行されている。わが国の精神病の入院患者の大多数は、この協会に加盟の私立の精神病院が引き受けているので、その意味で重要な雑誌である。他方、時代を反映して、精神科の看板をかかげる開業医も増えてきた。大阪精神神経科診療所医会という組織があって、バラエティーに富んだおもしろい「会誌」を発行している。各診療所の紹介記事もあり、病診連携の参考になる。私の病院のすぐ向かいに大阪府立中宮病院があり、これは東京でいえば松沢病院に相

当する単科の精神病院であるが、この病院も「紀要」を刊行し始めた。

医学雑誌ではないが、精神科と関係が深くて読んでいて楽しい雑誌もある。マインドサイエンスの総合誌と銘打った青土社の「イマーゴ(imago)」は、毎号特集で、神経心理学の現在、エロスとタナトス、夢、といったスマートなテーマを取り上げている。「こころの科学」、「現代のエスプリ」も各号が校内暴力、カウンセリング、うつ病、等のタイトルをつけ、心理・教育関係者向きのようではあるが、参考になる。

ついでに言えば、精神科に関する知識は、精神科の本や雑誌からのみ得られるとは限らない。睡眠薬の副作用などは、新聞、テレビ、週刊誌でいちはやく報道される。「病院図書室」の前号に当院の首藤さんが書いているが、L－トリプトファンの副作用の情報は最初に業界紙に出たのであって、専門学術雑誌には詳細なデータが発表されはするが、その時期は一番おそいのである。私も、自分の実験していた物質に思いがけない薬理作用があることをWall St-Journalから知って、さすがに株屋さんは情報が早いと感心したことがある。

### 3. 海外の雑誌

世界の精神医学の中心は、今世紀の前半はドイツであったが、後半はアメリカに移った。また、初期には精神医学と神経学が分化していず、研究方法は脳の病理組織学が主流であったが、その後精神分析、力動精神医学がさかんになり、現在は生物学的精神医学が全盛である。こういう背景が医学雑誌の興亡にそのまま反映してくる。伝統のあるドイツの雑誌が廃刊になったり、英文の雑誌に生まれ変わったりしている。一方、新しい研究領域の雑誌が次から次へと発刊されている。

#### (1) アメリカ

米国の精神医学雑誌では、AM J PSYCHIATRYとARCH GEN PSYCHIATRYが双璧である。

AM J PSYCHIATRY(Washington)はAPA(American Psychiatric Association)の機関誌で、1841年創刊時にはAM J INSANITYと呼ばれていたが、1921年から現在の名称になっている。世界中で最も広く読まれている精神医学雑誌だそうである。毎号special articleとして展望・総説的な大型論文が数篇載り、これは表紙に題名が出ている。続いてregular article十数篇、短報、書評(充実している)、Letters to the editor(多数)、会報、が載せられている。内容はbiologicalなもの、socialなもの、その他あらゆる面にわたっており、アメリカ精神医学の動向が感じとられる。

ARCH GEN PSYCHIATRY(Chicago)はAMAによって刊行され、85ケ国に36,700人以上の購読者を有している。1919年にARCH NEUROL PSYCHIATRYとして創刊されたが、1959年にARCH GEN PSYCHIATRYとARCH NEUROLの二つの雑誌に分かれた。したがって、1959年からVol.1が始まっている。ARCH GEN PSYCHIATRYは論文が主体で学会告示等は載せない。その代わりというわけでもなかろうが、求人広告などは出ている。製薬会社の広告は両誌とも派手である。薬の商品名は会社が勝手につけているので、国によって違うことがあり、我々がふだん処方箋に書いている薬が、アメリカではこんな別の名前で売られていたのかとわかったりする。

J NERV MENT DIS(Baltimore)は1874年創刊の古い歴史を誇り、臨床診療のための行動科学をスローガンにかかげている雑誌である。J CLIN PSYCHIATRY(Memphis)はもとのDIS NERV SYSTが改称されたもので、治療(薬物療法)に関する論文も多く、精神科臨床医に役立ってきた。

お隣の国カナダにはCANAD J PSYCHIATRY(Ottawa)がある。カナダはいまだにケベック州の独立運動が続いているようにフランス色も強く、公用語も英仏両方であり、したがって雑誌も前記の英語名に並んでLa Revue Canadienne de Psychiatrieと仏語で併記されている。中味の論文は英語で書かれたものが多くて仏語は少ないが、英語の論文には仏語のResumeが、仏語の論文には英語のSummaryがついている。

#### (2) イギリス

英国を代表するのはRoyal College of Psychi-

atristsにより刊行されているBRIT J PSYCHIATRY(London)である。1853年にASYLUM JOURNALとして創刊され、1858年から1963年の間はJ MENTAL SCIENCEの誌名であった。小さい版に小さい字の論文がぎっしり詰まっている。英国の経験主義を反映して実証的な臨床研究が主で、中でも数字をあげた疫学的なもの、地域精神衛生に関するものが多い。書評欄も優れている。時々BJP Review of Booksとして小冊子がつき、一つの本に数ページを割いて詳しく論評している。

J NEUROL NEUROSURG PSYCHIATRY(London)もよく知られているが、精神科領域の論文は少なく、あっても例えばパーキンソン病の精神症状というようなNeurologyがらみのものである。他に季刊のJ PSYCHIATR RES(Oxford)が、精神医学の臨床、基礎、検査技術、方法論を扱っている。よく似た名前のPSYCHIATRY RES(Limerick)はアイルランドの雑誌で、論文を速く出版することを謳って年16回刊行している。

(3) ドイツ

ドイツ語圏には、精神医学史上に重要な役割を果たした雑誌がいくつもある。それらの編集者や論文の著者名をみると、精神医学・神経学の巨星がずらりと並んでいて、圧倒的な眺めである。これらの雑誌には現在まで続いているものもあり、また廃刊、統合、改称されたものもある。精神科においては、古くなっても価値を失わない論文が他の科以上に多いので、それらを収載した古い雑誌も紹介しておく。

1844年にALLG ZEITSCHR PSYCHIATRが創刊されたが、約100年続いた後、1949年に廃刊になった。現存の雑誌の中で最も古いものは、精神病は脳病であるというテーゼで有名なGriesingerによって1868年に創刊されたARCH PSYCHIATR NERVENKR(Berlin)で、幾多の変遷を経て現在はEUR ARCH PSYCHIATRY CLIN NEUROSCI(Berlin)という英文の雑誌になっている。ドイツ語のままではやはり存続が難しいのであろう。1897年創刊のMONATSSCHR PSYCHIATR NEUROL(Berlin)も、PSYCHIATRIA ET NEUROLOGIAとなり、さらにPSYCHIATRIA CLINICAを経て、現在はPSYCHOPATHOLOGY(Basel)となっている。

1910年にはZEITSCHR GESAMTE NEUROL PSYCHIATRが創刊された。編集者にはAlzheimerやGaubの名がみえる。これは原著主体のOriginalien版と抄録主体のReferate版とから成っている。前者には、精神病の疾病学・体系化を打ち建てたKraepelinの古典的論文が載ったりしているが、1947年に前記のARCHに吸収統合された。Referate版は1921年にZENTRALBL GESAMTE NEUROL PSYCHIATRと改称され、精神科領域の主要論文が抄録されている。

比較的新しく1928年に創刊されたNERVENARZT(Berlin)は、その名前のままで現在まで続いている。Nervenarztとは精神・神経科医という意味で、その領域の研究と診療の雑誌であるが、現在は精神医学の論文が大半であり、精神病理の論文もかなり掲載されている。ドイツ語圏内では最もよく読まれている雑誌であろう。当院の図書室にも、他は英文誌ばかりであるが、この雑誌だけは入れている。FORTSCHR NEUROL PSYCHIATR(Stuttgart)は総説誌で、かつてBleulerがここに5年毎に精神分裂病研究を包括的に紹介していた。

(4) その他のヨーロッパ

フランスは小雑誌が多数乱立の状況を呈している。しかし、Societe Medico-Psychologiqueの機関誌であるANN MED PSYCHOL(Paris)が1843年創刊され、本年第150巻を刊行中で、これが最も正統的なものであろう。Medico-Psychologiqueといっても心理学ではなくて精神科の雑誌である。その他、友人に聞いたところでは、病院精神医学、地域医療の月刊誌のINFORMATION PSYCHIATRIQUEやアンリー・エイの流れをくむEVOLUTION PSYCHIATRIQUEがある。しかし、これらの精神医学誌よりも神経学のREV NEUROLの方が日本の精神科医にはずっとよく知られている。

イタリアにはMINERVA PSYCHIATR(Torino)があるが、これも知っている人はあまりいないだろう。ちなみにMinervaはローマ神話の知恵の女

神の名である。

今バルセロナ・オリンピックの開かれているスペインには、ACTAS LUSO ESP NEUROL PSIQUIATR CIENC AFINES(Madrid)やANALES PSYQUIATRIAがある。両者とも臨床中心で、統計を用いた社会精神医学的な研究が多い。

北欧のACTA PSYCHIATR SCAND(Copenhagen)は、おそらくこの項であげたどの精神医学雑誌よりも有名である。英文誌であるためかよく読まれているが、1926年創刊時はACTA PSYCHIATR NEUROLという名で、英、仏、独語の論文が混っていた。

ソ連には、いやソ連は昨年解体したのでロシアというべきであろうが、コルサコフ症候群やコルサコフ精神病で有名なKorsakovの名を冠したZHURNAL NEVROPATOLOGII I PSIKHIATRII IMENI S.S. KORSAKOVA(Moskva)がある。ここにはアルファベットで綴ったが、実物はもちろんキリル文字を用いたロシア語で書かれ、表紙にはコルサコフの肖像が描かれている。短いながら英語のsummaryが各論文についており、表紙の裏にはS.S.Korsakov Journal of Neuropathology and Psychiatryという英文名もみえる。

(5) 欧米の専門領域の雑誌

今まで精神科全般の雑誌について述べてきたが、次に精神科及びその周辺の個々の専門領域の雑誌を紹介しよう。

BIOL PSYCHIATRY(New York)は、Society of Biological Psychiatryが刊行する月2回の研究重視の雑誌である。20年以上前になるが、アメリカ留学中にマイアミビーチでAPA総会と一緒にこの学会が開催され、そこで研究発表をしたことがある。私は会員ではないので、by invitationとプログラムに断り書きがついていたのを覚えている。その発表内容は論文にしてこの雑誌に掲載された。その頃、biological psychiatryそのものはすでにさかんであったが、雑誌は創刊後まだ日が浅かった。マイナーな雑誌かと思っていたら、今は確固たる有力誌に成長している。

PSYCHOPHARMACOLOGY(Berlin)もよく読まれている。この雑誌は精神薬理の臨床の他に、薬の相互機序や動物実験による行動薬理学の領域も含んでいる。私が以前にreserpineの論文を書いたときはPSYCHOPHARMACOLOGIA(Berlin)と称していたが、後に誌名の語尾が現在のものに変わった。

心身医学の領域ではAmerican Psychosomatic Societyの機関誌のPSYCHOSOM MED(Baltimore)や、International College of Psychosomatic MedicineのJ PSYCHOSOM RES(Oxford)がある。神経心理学領域に関心を持っている人にはNEUROPSYCHOLOGIA(Oxford)、CORTEX(Milano)、BRAIN LANG(New York)は重要な雑誌である。PSYCHOL MED(London)は臨床精神医学と関連基礎科学(心理学、社会科学を含む)の季刊誌である。

精神分析、精神療法も重要な領域である。フロイトがウィーンで創始した精神分析は、アメリカで発展して多くの分派が生まれた。INT J PSYCHOANAL(London)は、1920年にFreudの指導のもとにE. Jonesによって創刊されたフロイト正統派の雑誌である。AM J PSYCHOANAL(New York)は、新フロイト派のHorneyにより1941年創刊された。J AM PSYCHOANAL ASSOC(Madison)は自我心理学派の雑誌である。ドイツ語のものでは、ZEITSCHR PSYCHOSOM MED PSYCHOANAL(Gottingen)やZEITSCHR KLIN PSYCHOL PSYCHOPATHOL PSYCHOTHER(Munchen)がある。

精神疾患の中で最大の課題である分裂病については、SCHIZOPHR BULL(Rockville)がある。これは米国の政府機関であるNIMHが分裂病に関する情報を流布し、交換する目的で刊行しているものである。ある時、学会の合間に中年のおばさんとおしゃべりをしていたら、それがこの機関の職員で、この雑誌を無料で送付してくれることになった。その代わりにあなたの論文ももらいたいと言われた。約束どおりずいぶん長い間送ってくれていたが、とうとう来なくなった。こちらが論文を送れなくなったためか、米国の経済が苦しくなったためか、理由はわからない。最近、これの日本語版が「精神分裂病研究の進歩」という題で星和書店から出ている。また、1988年にSCHIZOPHR

RES (Amsterdam) が創刊され、こちらもよく読まれているようであるが、カタログを見ると購読料が年10万円とあり、一般病院の図書室へはとても入れられないだろう。

もう一つの大きな精神病の躁うつ病については J AFFECT DISORD (Amsterdam) があり、広い意味の感情障害ということで、躁、うつ、不安、恐慌性障害を取り上げている。

## 4. おわりに

現在、世界中には35,000以上の医学雑誌があり、毎年200誌以上が創刊されているそうである。有力誌に限ってみても、1992年の Index Medicus には 3,030誌が登録されており、そのうち Psychiatry 部門には85誌が入っている。これだけの雑誌に目を通すのは大変である。

SCI (Science Citation Index) が Impact Factor (被引用頻度) による医学雑誌のランキングを毎年発表しているので、その一部を表にしてここに掲げる。自慢できることではないが、この表には今まで知らなかった雑誌がいくつも入っている。私の頭の中のイメージ、それはそれらの雑誌の格付けのようなものであるが、それとこのランキングとはずいぶん違っている。この表には20位までしか載せていないが、1990年版では Nervenarzt、Fortschritt、Zhurnal、Annales などは Jap J と並んでやっと40位台に姿を現してくる。引用頻度は必ずしもその雑誌の価値を表さないということか、それとも私が医学の進歩についていけていないということなのだろうか。

医学雑誌の普及度には、その国の医学の水準や国力が反映されるであろうが、わが国の場合は使用言語が日本語であるために、国際的にどれだけ読まれているかということになると、非常に不利である。Index Medicus には、わが精神神経誌も Seishin Shinkeigaku Zasshi、Psychiatria et Neurologia Japonica として収録されてはいるが、引用されることは殆どない。Yale大学に友人を訪れたときに、図書館で精神神経誌を見て、よくぞ置いてくれていると感謝したが、あまり利用されている様子はなかった。やはり論文は英語で発表せねば駄目である。

この稿を書くにあたって、阪大の生命科学図書館に数回足を運んだ。開架式の棚にずらりと並ぶ1800年代のドイツ語の雑誌を眺めて、ちょっとばかり古き良き時代の雰囲気を味わった。同時に、最新の医学雑誌について、いかにおびただしい数が出版されているかを実感した。ここは医学分野の全国の外国雑誌センターということで、実に数多くの雑誌が収集されている。

しかし、必要なときにすぐ利用できるように、ある程度の雑誌は手元に置いておきたい。当院の図書室には精神科関係の雑誌は約10誌あり、一般病院としては恵まれている方だろう。我が家でも10誌ばかり保存している。その中には、東大正門前の柴善書店でバックナンバーを求めて、創刊号から揃えたものもあるのだが、スペースをとるので困っている。そしてさらに大きな問題は、それらを読む時間がないことである。コーヒーを飲みながら新着雑誌に目を通すというような時間の余裕が欲しいと思う。

**SCIのランキング**

| | 1980年 | 1990年 |
|---|---|---|
| 1 | ARCH GEN PSYCHIAT | ARCH GEN PSYCHIAT |
| 2 | AM J PSYCHIAT | AM J PSYCHIAT |
| 3 | PSYCHOL MED | PSYCHOPHARMACOLOGY |
| 4 | BRIT J PSYCHIAT | SCHIZOPHRENIA RES |
| 5 | PSYCHOSOM MED | PSYCHOSOM MED |
| 6 | BIOL PSYCHIAT | BIOL PSYCHIAT |
| 7 | PSYCHOPHARMACOLOGY | J CLIN PSYCHIAT |
| 8 | SCHIZOPHRENIA BULL | PSYCHOL MED |
| 9 | ACTA PSYCHIAT SCAND | BRIT J PSYCHIAT |
| 10 | J NEUROL NEUROSURG PSY | J AFFECT DISORD |
| 11 | COMMUN PSYCHOPHARMAC | J AM ACAD CHILD PSY |
| 12 | NEUROPSYCHOBIOLOGY | SCHIZOPHRENIA BULL |
| 13 | J NERV MENT DIS | J NEUROL NEUROSURG PSY |
| 14 | AM J ORTHOPSYCHIAT | J PSYCHIAT RES |
| 15 | J AM ACAD CHILD PSY | J NERV MENT DIS |
| 16 | INT J CLIN EXP HYP | PSYCHIAT RES |
| 17 | J CLIN PSYCHIAT | PSYCHOPHARMACOL BULL |
| 18 | J PSYCHIAT RES | HOSP COMMUN PSY |
| 19 | J CHILD PSYCHOL PSY | COMPR PSYCHIAT |
| 20 | COMPR PSYCHIAT | J PSYCHOSOM RES |